

主よ、私たちは誰のところに行きましょうか。
永遠の命の言葉をもっているのは、あなたです。（ヨハネ福音書6の68より）

Lord, to whom shall we go?
You have the words of eternal life.

この世にはじつにさまざまの言葉があふれている。新聞、雑誌、テレビ、インターネット…。今日の状況は、まさに言葉の洪水である。

しかし、そうした果てしない言葉のはんらんの中かで、私たちの傷ついた心、孤独な心、解決できそうもない難しい現実には打ち倒されているような心に新たな光を、そして力を与える言葉はあるだろうか。

かえって、大多数の言葉は、空しく消えていくか、あるいはむしろそのような心にさらなる闇を増すものにすぎないといえる。

そうしたなかで、過去数千年にわたって、闇と混乱のただなかで起き上がれないほどの苦しみや悩みのなかにあるひとたちに光を与え、立ち上がらせ、さらに前進させていったのが神の言葉である。

そしてその神の言葉を誰にも分るように、じっさいにこの世に来て、生きて、人間の罪をになって死なれたキリストの言葉こそは、誰もが接することのできる言葉であり、かつ命を与える言葉にほかならない。

私たちが本当に求めているのは、そうした力ある言葉—言い換えれば永遠の命を持っている言葉、時間の流れに空しく消え去っていくことのない神の言葉である。

そのような命の言葉を、完全に持ってこの世に生きたのが、主イエスであった。そして十字架で処刑された後も、復活して神とともにあり、神に等しき存在として現在も私たちに神の言葉を語りかけておられる。

私たちも、この無数の空しい言葉のはんらんする世にあって—そしてますますその傾向は大きくなっていきつつある—決して消えることなき不滅の言葉を求め続けていきたいと思う。

神は、また、そのような命の言葉を、私たちの身近な自然のすがたにも託しておられる。頭上に広がる秋の澄んだ青空—それも無言でありながら、神の命の言葉、メッセージを語り続けている。

あるいは、草むらから一心に歌い続ける虫たちの賛美、さわやかな風のながれ、小さな野草の花やその姿、さらに樹木の一つ一つさえも、じっとみつめるときには、そこからも神からのメッセージが届いてくるようにされているのである。



この写真で、大雪山系の主峰、残雪の残る旭岳を背景にしている キバナシャクナゲは、淡黄色の花を咲かせる高山植物です。

樹木であるけれど高さは大体10cm程度で、せいぜい30cmという低木です。

本州の中部以北の2500m以上の高山から北海道の高山に見られる植物で以前に紹介したハクサンシャクナゲよりもさらに、高山地域に分布しています。

寒さの厳しい地域、また雪で長く覆われた地域であるために、このような低木となっていると考えられています。

シャクナゲには、さまざまのものがあり、現在では花屋さんにはいろいろなものが見られます。それらは自然にあった

シャクナゲを用いて、人間が人工的に色や花びらをより目立つようにしたものが多いたのですが、このキバナシャクナゲは太古の昔から、いっさいの人間の意図の混入しないもの、神の御計画のままのすがたを見せています。長期にわたる冬の耐えがたいような厳しい寒さ、風雪とその重みのただなかで生育して花を咲かせる、こうした環境も含めて、神が込められた深い意味、そのご意志がそこに感じられます。

車もロープウェイなどもなかった遥かな大昔から、近年100年ほど前までは、このような場所に来るには、平地からだ大変な時間と労力を要し、道なき道を登ってはじめて出逢う植物だったと考えられますから、その長い歴史のなかで、この環境でこの花に接することのできた人はほとんどいなかったと考えられます。人間がこの北海道に現れてから長い長い年月、こうした植物は人間と出逢うこともなく、ただ咲き続けてきたのです。人間の神に関する関わりもそれと似ています。人間が現れるはるか昔—永遠の昔から神は存在し続けていたのですが、人はずっと気付くことなく時間は流れてきたのです。そしてその流れのなかのある時にその真理なる神と出逢うのです。